

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：34428

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870942

研究課題名(和文) がんの終末期を迎える人と家族を支えるための啓発プログラムの実施と評価

研究課題名(英文) Implementation and Evaluation of an Awareness Program to Support People in the Terminal Phase of Cancer and Their Families

研究代表者

竹下 裕子(吉田裕子)(Takeshita, Hiroko)

摂南大学・看護学部・准教授

研究者番号：10437668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：地域で生活している住民を対象に、がん終末期を迎える人に対する認知・関心・支援の現状を調査し、がん終末期を迎える人に対して身近な人々が提供できる支援等の情報を発信し、地域で支えるための啓発プログラムの考案、試行、評価を行うことを目的とした。調査では、若者と、大学が立地する地域住民を対象にアンケート調査を実施した。若者と若者以外では調査結果が異なり、世代による特徴を反映した啓発プログラムが必要であると考えられた。啓発プログラムの試行では、若者と、大学が立地する地域住民を対象に実施した。さらに地域で活躍するがん患者会への参加や運営協力、企業との打ち合わせを通して資料収集とアイデア検討を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study I investigated current awareness, interest, and support of people in the terminal phase of cancer among residents of communities. My objective was to disseminate information on topics including the support and other assistance that neighbors of patients in the terminal phase of cancer can provide them by devising, trialing, and evaluating an awareness program for support in the community. I first trialed this awareness program in young people and compared the results from before and after implementation. Then expanded the scope of the trial to residents of communities with universities. In conducting this study, trialing and evaluating the awareness program, and gathering information, I revealed challenges for future research development and new policies for "an awareness program to support people in the terminal phase of cancer and their families."

研究分野：成人看護学・がん看護

キーワード：がん終末期 啓発プログラム 地域住民

1. 研究開始当初の背景

わが国では急速に高齢化が進み、2025年には65歳以上の高齢者数は3,657万人(全人口に占める割合; 30.3%)と予測されており(厚生労働省)、地域包括ケアの構築が推進されている。

吉田ら(2007)は、がん終末期にある患者は、家族や大切な他者が癌や死の話を避けているような素振りをしたり嫌がったりするために率直に話ができない状況や、死への思いや感情を吐露できない状況、さらには死後の準備をしようと必死に思いを伝える自分を理解されないと感じ、苛立ちや焦燥感を抱く状況にあることを明らかにし、身近な周囲の理解やコミュニケーションのあり方が患者にストレスを与えて疲労感を増幅していることを指摘した。竹下ら(2014)は、がんの終末期を迎える人は、関係性を失う感覚を抱えながら、大切な他者とのつながりを維持・発展させるために絶え間ない努力と行動を呈しているという結果を得、このような努力や行動が順調に推移するよう助けるためには、外部の理解と関わり方が重要であると指摘した。以上より、今後は、地域、住まいのなかで人生の終末段階を過ごす人が増えていくと推測されるなか、住民一人ひとりが終末期がん患者の支え手になれるような啓発プログラムの検討が必要であると考える。

2. 研究の目的

地域で生活している住民を対象に、がん終末期を迎える人に対する認知・関心・支援の現状を調査し、がん終末期を迎える人に対して身近な人々が提供できる支援等の情報を発信し、地域で支えるための啓発プログラムの考案、試行、評価を行うことである。

3. 研究の方法

(1) がんの終末期を迎える人やその家族に対する認知・関心・支援の現状に関する資料を収集するための質問紙調査表を作成し、無記名自由記述式質問紙調査を実施する。

(2) 啓発プログラムを実施し、その効果を評価するために、プログラム実施後に無記名自由記述式質問紙調査を実施する。

(3) 分析は、統計学的分析(単純集計)と自由記述内容の質的帰納的分析を行う。

4. 研究成果

(1) 少子高齢社会を背景に、「やがて『1人の若者が1人の高齢者を支える』という厳しい社会が訪れることが予想(総務省・厚生労働省)」されていることから、調査と啓発プログラムの実施を、まずは対象を若者に焦点を当てて行った。

《目的》青年期にあたる大学生の“末期がん”に対するイメージおよび患者支援への意識を調査し、がん終末期を迎える身近な人を支援できる若者増加に向けた教育プログラム検討資料とする。

《方法》看護系以外の学部で、2013年6月、2014年6月にターミナルケア講義60分及び遺族の講演30分、計90分の授業受講終了後、無記名自由記述式質問紙調査に回答。分析は、統計学的分析、自由記述内容の質的帰納的分析。所属大学倫理審査委員会承認後実施。

《結果》対象53、回収率93%。身近な人が末期がんと診断された体験有13をA群、体験無40をB群。分析の結果、“末期がん”イメージは、A群:<死>38.5%、<辛い>38.5%、<苦しい>38.5%、B群:<死>47.5%、<苦しい>32.5%、<自宅で過ごせなくなる>32.5%。受講後の“末期がん”イメージ変化は、A群:<変化なし>46.2%、<最期まで生きている>15.4%。B群:<最期まで生きている>35%、<最期まで生きることを支えたい>22.5%。体験有り者(A群)の実施した支援は、<できるだけ会いに行きそばに居る>46.2%、<支援できなかった>38.5%。今後どのような支援ができると思うかは、A群:<そばに居て一緒に過ごす>69.2%、<できるだけ会話>53.8%。B群:<最期の希

望を実現>55%、<そばに居て一緒に過ごす>45%で、<支援できない>10%。末期がん患者支援への関心度の4段階回答は、「非常に関心がある」・「少し関心がある」が98.1%。《考察》大学生の“末期がん”イメージは、死のイメージに類似しており、苦しく辛い感情や衰弱状態を連想しており、また、学生の末期がん患者に対する支援は、経験の有る無しに関わらず関心があり、苦しみや人生の終末を生きる人との関係を考えているといえる。体験有り者の受講前後でのイメージ変化は殆ど無いが、支援のできなかつた者が支援への可能性を見出せている。体験無し者では、イメージを「死」から「生きている」人間像へ広げるきっかけを得たのではないかと考えられる。しかし、自らの支援の可能性には授業内容がそのまま反映されており、支援できない回答も10%あり、90分の教育では支援を実際に捉えることに限界があると推測する。教育プログラムには、現実の映像に触れることや、体験の無い者が直接体験者と意見交換することなどを通して、先ず末期がん患者に対する関心を高め、その上で自分の出来る支援について考えを進められる内容や期間を検討する必要がある。

(2) (1)に続いて対象の範囲を広げ、大学が立地する地域(枚方市・八幡市他)で生活している住民を対象にして調査を実施した。《目的》地域で暮らす住民の“末期がん”に対するイメージおよび患者支援への意識を調査し、がん終末期を迎える人と家族を地域で支える啓発プログラム開発の資料とする。《方法》対象は大阪近郊に立地する大学の大学祭に参加の地域住民で、無記名自由記述式質問紙調査に同意した者。統計学および質的帰納的分析。大学倫理審査委員会承認後実施。

《結果》対象60(男25、女35)年齢10~90歳代で40歳代が最多。“末期がん”イメー

ジ; <いよいよ最期で余命いくばくもない>21.4%、<最期をどう生きるかの心構えが必要>15.7%。末期がん患者への関心度(4段階回答); <非常に関心がある>・<少し関心がある>90%。末期がん患者に対して自身ができる支援への関心度(4段階回答); <非常に関心がある>・<少し関心がある>85%。末期がん患者に対してどのような支援ができると思うか; <本人の望むことをして過ごせるようにする>18.5%、<話を聴いたり話し相手になる>10.8%。うち、身近な人が末期がんと診断された経験有りの者26(43%)が、当時感じたり考えた内容; <辛そうで楽にしてあげてほしい>17.2%、<末期ケアに関する情報がほしい>13.8%、<何も考えられない>13.8%。当時実施した支援; <支援できなかった>24.1%、<思いを聴き話し相手になる>13.8%。終末期医療・ターミナルケア・ホスピスについて知っているか(4段階回答); <よく知っている>・<知っている>46.7%、<よく知らない>・<知らない>53.3%。

《考察》地域住民の“末期がん”イメージは、残りのいのちを「生きる」人間像が連想された結果であると考えられる。(1)で実施した調査で、大学生の“末期がん”イメージは、悲しみ・恐怖などの感情や、苦痛・不自由が大半であったのとは大きく異なる。また、地域住民の末期がん患者支援への関心度は高いが、終末期医療・ターミナルケアの知識をもつ者は半数以下であり、身近な人が末期がんと診断された経験の有る者のうち、実際には支援できなかった者や、無回答も31%あることから、現実的には末期がん患者に関する情報不足により、支援の可能性を見いだせない状況にあると推測する。啓発プログラムは、現実の事例を用いた異なる世代間のディスカッションが有効であるといえる。末期がんイメージを「死」から「生きる」人間像へ広げることや、自らの支援の可能性について現実的に

考えを進められる内容を検討する必要がある。なお、本研究成果は2015年日本臨床死生学会大会にて口演発表を行い、日本臨床死生学会より論文化の推薦を受けた。

(3)若者以外の地域住民を対象にした啓発プログラムは企画・試行は実施したが、参加者数が少なかったため、前後での比較評価はできなかった。このため、同様の内容を所属大学における地域医療研究センター主催の公開講座にて講演を行った(2016年6月25日;参加者13名)。今後、啓発プログラムを実施する際には、健康に関する催しなど住民が大勢集まる場や、がん患者やその家族が集まるがん患者会、患者サロンなどに出向いて、そのうち一部の場や時間を使用してプログラムを実施する方法が考えられる。また、定期的開催を企画することや、企業と連携してイベントを盛り込み楽しみながら取り組めるような工夫が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(1件)

竹下裕子, 佐藤禮子: 終末期がん患者が身近な人々とのつながりを維持するためにとる行動. 臨床死生学 18/19: 58-67, 2014

〔学会発表〕(計3件)

竹下裕子, 佐藤禮子: 末期がんに対する地域住民のイメージと患者支援への意識に関する調査. 第20回日本臨床死生学会大会(東京), 2015.

竹下裕子, 佐藤禮子: 末期がんに対する大学生のイメージと患者支援への意識に関する調査. 第20回日本臨床死生学会大会(神奈川), 2014.

竹下裕子, 佐藤禮子, 橋弥あかね: 大学生の末期がんのイメージおよび患者支援に対

する意識の調査. 第19回日本臨床死生学会大会(東京), 2013.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹下 裕子 (Takeshita, Hiroko)
摂南大学・看護学部・准教授
研究者番号: 10437668

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無

(4) 研究協力者

橋弥 あかね (Hashiya, Akane)
大阪教育大学・教育学部・講師
研究者番号: 00457996

竹下 篤 (Takeshita, Atsushi)
大阪医科大学・医学部・講師
研究者番号: 30298765